

14:00 前時の内容の確認

授業
ハイライト

主体的・対話的で
深い学びへ

実践
アクティブ・ラーニング

世界史

●2年生「世界史B」の授業で、単元は「ローマと地中海世界の成長」。この日は、地中海世界を支配したローマ帝国が、領土の急拡大により社会の変質を招き、カエサルが登場につながることを、グループワーク等を通して理解した。(授業デザインはP.21参照)

プリントやメモを基に前時の学習を整理し、1分間で伝え合うペアワークを実施。次にアイスブレイクとしてニュース映像を流し、「おかしいことに気づいた?」と、吉川先生が質問。複数の生徒から、「メルカトル図法にミサイルの射程を書き込むのは変だ」という指摘があった。その後、アバターが本時のテーマを述べる先生自作の動画を流した。

場面をスピーディーに切り替え
生徒とともに授業のリズムをつくり、
思考し続ける状態に導く

吉川先生のアクティブ・ラーニング

世界史は暗記科目という
イメージを最初に打ち崩す

吉川先生の世界史の授業は、生徒が世界史に抱く「暗記科目」というイメージを打ち崩すことから始まる。世界史が始まる2年生の冒頭に2時間を使ってガイダンスを行い、世界史の意義や身につく力をじっくりと説明する。

「不透明感が増す時代を生き抜くためには



静岡県立掛川西高校

吉川 牧人 ぎつかわ まさひと

教職歴16年。同校に赴任して4年目。

研修課長。ICT推進委員長。

アクティブ・ラーニングの実践は4年目になる。

静岡県立掛川西高校

◎「社会に貢献し、未来を切り拓く人間を育てる」を教育目標とし、「鍛えよう若き日を」をスローガンに掲げ、文武両道を実践。野球部は全国高等学校野球選手権大会に出場するなど、部活動も盛ん。

◎設立 1901(明治34)年

◎形態 全日制/普通科・理数科/共学

◎生徒数 1学年約320人

◎2017年度入試合格実績(現浪計)

国公立大は、北海道大、東北大、東京大、京都大、大阪大などに132人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、明治大、早稲田大、同志社大などに延べ853人が合格。

◎URL

<http://www.edu.pref.shizuoka.jp/kakegawanishi-h/home.nsf/>

吉川先生が準備したプリントに沿って、本時のポイントを押さえていく。先生が一方向的に話すのではなく、「ここはどう思う？」などと生徒の思考を促しながら必要な知識を確認していった。グループでの話し合いと発表、ペアでの資料の読み聞かせ合い、複数の動画や画像の提示など、次々と場面を切り替えて展開していった。

ローマ帝国の民衆の苦しい生活ぶりが書かれた資料を読み、グループで読み取れたことを話し合って発表。吉川先生が「考えたことを自由に述べて」と投げかけると、多様な考えが共有された。続いて、生徒個々が白地図に書き込みをしながら、ローマ周辺は農業が盛んで、安い農作物の流入が民衆の暮らしを悪化させたことに気づかせた。

場面をスピーディーに切り替え 授業にリズムを生み出す

1年目は知識構成型ジグソー法(※)などのALに取り組んだ。ところが、準備が大変で日常的に行えなかったため、ペアやグループなどの活動で学びを活性化する、「無理のない」授業に行き着いた。

吉川先生の授業は展開の速さが特徴だ。全体に向けて解説していたかと思うと、「ここからはグループで考えて」と話し合いを挟んだり、ペアで資料を読み聞かせ合ったり、頻繁に動画や画像を提示したりと、場面が素早く切り替わる。そのため、生徒には気を緩める暇がない。

「ずっと講義を聞くだけでは、生徒は集中力が

過去から学び、自分の考えを持つことが欠かせません。今後はAIの発達などに伴い、知識より知恵が重視され、思考力や探究力がますます求められるでしょう。そうした力の育成が世界史のねらいだと説明すると、生徒は徐々に世界史の学習へのイメージを改めていきます」

吉川先生がアクティブ・ラーニング(以下、AL)を始めたのは、同校に赴任した4年前。チャレンジを歓迎する校風に刺激され、これからの地歴・公民科のあり方を考えて一念発起した。

「新学習指導要領では『歴史総合』が新設されるなど、地歴・公民科はターニングポイントにあるため、先行的に授業改革を進めています」

続かず、受け身になったり、ほかのことを考え

始めたりします。こまめに話し合いの活動などを入れると集中力が途切れず、活動に備えて説明をしっかりと聞こうという意識にもなります」

アンケートを実施し、活動の時間配分や進め方などについて生徒の意見を聞き、生徒とともに授業をつくり上げることも大切に行っている。

「生徒が主体的に授業に参加すると、こちらの問いに対する反応が速くなり、テンポのよいやり取りができてリズムが生まれます。そういう空気ができると、生徒は授業に引き込まれて受け身になる暇がなく、常にアクティブに考えている状態になります」

また、ICTの活用もそうした授業に欠かせないという。

「板書や説明の代わりに動画や画像を提示することで効率的に進められ、活動の時間を確保することができます。ALの実践を始めてから、ICTの活用により、授業進度はむしろ速まりました」

思考の活性化・深化への配慮

世界史を日本史や地理と結びつけ 立体的な思考を促す

生徒を主体的にする工夫の1つは、授業のプリントを付箋紙に記入させることだ。生徒は、授業を通してキーワードだと思った語句を付箋紙に書きためていく。授業の最後のペアワーク

* ジグソーパズルを解くように、協力して全体像を浮かび上がらせる協調学習法の1つ。ある課題について、複数の視点で書かれた資料を読む「エキスパート活動」、そこで得た知識を交換し、考えを深めていく「ジグソー活動」、全体でグループの意見を交換する「クロストーク活動」の3つの活動から成る。

本時の学習内容を整理し、ペアで40秒間で伝え合う。「付箋紙に書いたポイントをつなげて説明して」と吉川先生。生徒は、学習内容を頭の中で再構成して自分の言葉で説明した。



今日の授業では4枚の付箋紙に記入しました。自分の言葉で説明するのは難しいですが、学んだ内容を整理でき、「こういうことが理解できた」と実感します。

あらかじめグループごとに設定されたテーマについて、生徒が講義をする時間を毎授業で設定。この日は、1グループが10分間で、少し先の授業に関連するテーマのシルクロードについて講義をした。講義の形態や方法はグループに任せられており、この日のグループは、スマートフォンに準備した資料をプロジェクターで投影し、全員で順番に説明した。



初めは付箋紙に記入するポイントをうまく絞れない生徒もいたが、次第にスムーズに書けるようになる。それに伴い、ペアワークの振り返りでも、学習内容を整理して、スムーズに相手に伝えられるようになっていく。

では、そのキーワードをつなげて文章にし、その日の学習内容を説明し合う。
 「『今日のポイントはどこだろう』と常に考えるため、授業に対して主体的になります。さらに、最後にポイントを踏まえて自分の言葉で説明することで、理解は一層深まります」
 生徒は付箋紙をプリントに貼って保管し、テスト前にはポイントを振り返るために活用しているという。
 さらに思考を深化させるため、度々日本史や地理と世界史を融合させて説明する。この日も、ローマの農業が他地域に負けた一因として、地中海性気候について取り上げるなど、地理の要素を確認する場面を設けた。
 「日本史や地理と関連づけることで、日本と

の関係や地理的な背景が見えてきます。すると、世界史だけの知識ではなくなり、様々な科目の知識が結びついて立体的に理解でき、生きる上で役立つ思考力につながります」
 また、生徒の思考を活性化させる教材開発にも力を入れる。ある授業で、自身が海外で撮影した動画を見せたところ、生徒の反応がよかったため、世界各地を訪れる回数が増えたという。
 「私が現地でも撮影した動画だと伝えると、生徒は一気に身近に感じて関心を高め、質問が飛んできます。自分のイメージとぴったりの教材を作れることもあり、渡航して撮影や資料集めを行っています」

場づくりへの配慮

自分が活躍できる役割を見つげるためのサポート

吉川先生は、世界史は異文化理解や他文化との共生を支える科目だと考えており、そうした力や姿勢を育てるために、授業ではグループでの話し合いを重視している。

「二人ひとりの考えや価値観が異なることに気づき、理解を深めていく経験が、他者を理解する力につながると考えています。一人ひとり違うのだから、必ずしも全員が積極的に前に出て発表する必要はなく、『グループ内で自分が活躍できる役割を探さない』と伝えていきます。例えば、発表したり、下調べをしたり、資料を作

授業デザインシート

【教科・科目】地理歴史・世界史

【設定時数】8時間中の3時間目

【分野・単元】ローマと地中海世界の成長

【本時全体の目標】ローマの混乱がカエサルが登場につながることを理解する。

【テーマ・作品】ローマ社会の変質と内乱の一世紀

学習内容	自校の生徒の特性を踏まえた各学習内容における主な目標 (身につけさせたい力・姿勢)	左記の力・姿勢の「学力の3要素」への分類	左記の力・姿勢を育むための指導内容	教師による発問・働きかけの内容	教師が特に観察・配慮すべき点
前時の内容の確認	主体的に知識を定着させる。他者に教えることで知識の定着を図る。	・主体性	生徒はペアで前時の内容を確認し合う。		温かく見守る。
アイスブレイク	仲間と協力して問題を解決する。	・思考力 ・協働性	報道番組の動画を見て、グループで問題点を探す。グループごとに予想する内容をホワイトボードに書き、順番に発表。中学校で学んだ地図の知識に気づかせ、クラス全員で共有する。	報道番組の映像を見せ、おかしいところがないか、生徒に探させる。今回は、メルカトル図法にミサイルの射程を書き込んでいる点がおかしいことに気づかせる。 ※政治・歴史理解に地理的概念も必要となることに気づかせる。	積極的にグループで議論できる雰囲気をつくる。
前時の内容の確認	視覚や聴覚を使ってイメージを膨らませる。	・思考力	動画で前時の内容の復習をする。	今回のメインテーマにつながるようにコメント。	
グループワーク	資料から当時の様子を想像し、共同作業をしながら答えを探していく。積極的にほかのグループに自分たちの見解を伝える。	・思考力 ・表現力 ・協働性	教師による説明を聞き、前方の画面を見ながらプリントに書き込む。それを基に、どのように社会が変わったのかをグループで話し合い、ホワイトボードにまとめて発表をする。	資料を配るだけではなく、ゴールに向けた導きを随時示す。	放置せず、干渉し過ぎずにかかわる。
生徒による講義	自分のグループが担当した課題を的確に他者に伝える。内容、根拠をしっかりと述べ、分かりやすく表現する。	・思考力 ・表現力	長期的に取り組んでいるグループごとの課題の発表。1グループが全員の前で講義をする。	生徒が講義をしやすい雰囲気をつくる。	生徒の説明がなかったとしても、ほかの生徒の聞く雰囲気をつくる。
本時の重要語句の確認	受け身で授業を開くのではなく、自分が講義をするとしたらどの部分が大切かを主体的に思考し、付箋紙にポイントを書き込む。	・思考力 ・主体性	教師から講義を受けた内容の中で、自分が大切だと思ったワードを付箋紙に書き込み、プリントに貼る。		大切なポイントがどこかを説明し過ぎない。
本時の授業のまとめ	学んだ知識をペアワークで相手に教えることで、自らの知識を定着させる。	・思考力 ・表現力 ・主体性 ・協働性	本日取り組んだ内容をペアで教え合い、確認。その際、付箋紙に書いたワードをつなげて、文章にして説明する。	付箋紙で書いたポイントをつなげて説明するように徹底。	生徒の主体性を大切にすること。

*吉川先生作成の授業デザインシートを編集部が一部改編

成果と課題

事象の背景を思考するため 知識が定着しやすい

成したりと、それぞれが得意な役割を見つけて、チームとして機能させたいと考えています」
人間関係を深めながら、各自が役割を意識して活動できるように、グループのメンバーは年間を通して固定している。

授業を重ねるうちに思考力が育っていることは生徒の姿から感じ取れると、吉川先生は言う。
「生徒は常に思考しており、こちらの問いかけに対する反応も速く、『深く考えているな』と感じる発言も増えてきています」

また、AIを始める前と比べ、授業中に扱う知識の量は変わっていないにもかかわらず、定期考査の結果などから定着度が高まっていることを確認している。

「二問一答形式の丸暗記ではなく、歴史的事象の背景を思考しながら理解するため、知識と知識がつながって定着しやすいのだと思います」
今後は授業中の評価を含め、思考力を測定する評価手法を開発することが課題の1つだ。

「SNSなども活用し、生徒との双方向のやり取りを活発にしていきたいです。また、私はファシリテーターとして、思考を促す助言をして、生徒を成長させていけるような存在になりたいと考えています」